

第1回 古代イスラエル王国の歴史

- ・ユダヤ人の古代系譜
- ・南朝ユダ王国のその後
- ・日本にやってきた3種の秦人

出典：「物部氏の謎」(飛鳥昭雄 & 三上たける著 学研)
「徐福伝説を探る」日中合同シンポジウム(梅原猛 & 他著 小学館)
「出雲と大和のあけぼの」(斎木雲州著 大元出版)

1. ユダヤ人の古代系譜

参考資料1-1

(1) ノアの3人の息子

洪水によって人類が滅ぼされた地に降り立ったノアの息子たちは、セム、ハム、ヤフェットの3人

①ペルシャ人

- ・アーリア系の民族で、「旧約聖書」でいえば、大洪水で有名なノアの3人の息子の一人、ヤフェットの子孫。
- ・アーリア人とはインド-ヨーロッパ語族のうち、インドおよびイランに定住した支族。

②ユダヤ人

- ・ノアの息子、セムの子孫である。

セムは別名をメルキゼデクといった。大司祭メルキゼデクにまみえ、預言者として召命(しょうめい)されたのが大預言者アブラハムである。

- ・そのアブラハムの息子イサク、さらにはイサクの息子であるヤコブの別名をイスラエルという。すなわち、預言者ヤコブの子孫が今日でいうイスラエル人である。

③もう一人の息子、ハムの子孫がエジプト人をはじめとする黒人である。

(2) ヤコブの12人の息子

①ヤコブの12人の息子は4人の母から生まれた

生まれた順にルベン、シメオン、レビ、ユダ、ダン、ナフタリ、ガド、アシェル、イッサカル、ゼブルン、ヨセフ、ベニヤミンと名付けられた。

* 父ヤコブの死後、それぞれ皆一族の長となり、ルベン族、シメオン族、レビ族……という支族が誕生した。

ただし、レビ族だけは祭祀を司る専門職であるため、通常、イスラエル12支族には数えない。

①ヤコブの12人の息子は4人の母から生まれた(つづき)

* 紀元前13世紀ごろ:イスラエル人は古代エジプトに居た

- ・奴隸として虐げられていた彼らを救ったのが預言者モーゼ(レビ族)。「出エジプト記」に記す。
- ・そして、シナイ山で絶対神ヤハウエ(エホバ)から「十戒石板」を授かる。ユダヤ教が誕生する。

参照資料1-2

* 絶対神ヤハウエとの契約^(注)を結んだイスラエルの民は、その後40年の旅を得てパレスチナに

たどり着く。「古代イスラエル王国」を築く。首都はエルサレム。

(注)十戒とカナン(イスラエル)という地を保証するという「約束の地」の契約

参照資料1-3

- ・王国はダビデ王の時代に急成長し、その息子ソロモン王の時代に絶頂期を迎える。

エルサレムに壮麗な神殿「ソロモン神殿」を建築する。

- ・しかし、ソロモンが死ぬと王国は後継者をめぐり大混乱。ついには南北に大分裂する。

ユダとベニヤミンの2氏族から成る「南朝ユダ王国」、その他の10氏族から成る「北朝イスラエル王国」。

参照資料1-3

②失われたイスラエルの10支族

* 北朝イスラエル王国は首都をシケムに定め神殿を建設する

しかし、しばらくして十戒で禁じられている偶像礼拝に陥る。「黄金の子牛像」を作り神とした。

⇒絶対神ヤハウエの怒りを買い、罰を受ける。

* 紀元前722年、メソポタミヤで急速に勢力を拡大してきた「アッシリア帝国」がパレスチナ(現在のイスラエル)へ進出。

・「北朝イスラエル王国」は3年間包囲され首都シケムは陥落する。

・北朝イスラエルの民はアッシリア帝国軍に捕囚され、奴隸としてメソポタミヤは連行される。

* 紀元前612年、アッシリア帝国はメディアとカルデアの連合軍の戦いに敗れると一気に衰退し、滅亡する。

・奴隸の輶(くびき)から解放された北朝イスラエルの民はパレスチナに戻らず、歴史上から消える。

⇒「失われたイスラエルの10支族」という世界史上の最大の謎となった。

(3)失われたイスラエルの10支族の行方

①「10支族は今でもユーフラテス河の彼方におり、膨大な数となっている」

（「古代ユダヤ誌」フラヴィウス・ヨゼフ著）

パレスチナから見てユーフラテス河の彼方とは、アジアである。今のアフガニスタン、イラン、インド、そして中国といった広大な大地に移り住んだらしい。

②当時は、スキタイの影響がある

参照資料1-5、高句麗軍隊はサイト

*スキタイはカスピ海沿岸を発祥地とする騎馬民族でその痕跡は北欧から北朝鮮まで及ぶ。

また、スキタイ文化と言われる高度な金属文化（鉄、金等）をもっていた。

当時、北アジアの草原を縦横無尽に駆け抜け他国を侵略し、奴隸や財宝を略奪した。

⇒捕囚されていたイスラエル人は連れ去られ、遊牧の民であったことから騎馬民族の中に拡散していった。

*スキタイの流れをくむ東北アジアの騎馬民族

・夫余（ふよ）族は高句麗や百濟を建国し、その一派が日本列島へ

・スキタイの一派のサカ族の一つは、後に仏陀を生み出す釈迦族である。

・チベット系民族の一つ「羌族（きょうぞく）」は失われたイスラエルの10氏族の末裔であることが判明。（イスラエル10支族調査機関「アミシャーブ」）

⇒今のネパールに住む釈迦族の末裔シャーキヤやチベット人は日本人と遺伝子的に近く、YAP遺伝子を持つ。

参照資料1-4

2. 南朝ユダ王国のその後

(1) バビロンの捕囚

* 南朝ユダ王国も偶像崇拜(バアル礼拝)に陥ってしまう。
彼らに襲いかかったのはアッシリア帝国に替わって台頭してきた新バビロニア王国。

* 紀元前587年、新バビロニア王国の軍勢はパレスチナ地方へ侵攻

- ・首都エルサレムを包囲し、ソロモン神殿を徹底的に破壊する。
- ・神殿内部の財宝はみな跡形もなく略奪され、南朝ユダ王国は滅亡。
- ・イスラエルの民はバビロンへと捕囚される。(バビロンの捕囚)

(2) 解放後の南朝ユダ王国の民

① ユダヤの建国

* 紀元前538年、アケメネス朝ペルシャは新バビロニア王国を征服
キュロス大王は捕囚されていた南朝ユダ王国の人々を開放する。

* ソロモン宮殿の再建

- ・自由の身になったイスラエルの民の多くはパレスチナへ帰還。
- ・ソロモン宮殿を再建し、国造り。南朝ユダ王国は「ユダヤ」呼ばれるようになる。
⇒紀元2世紀にローマ帝国に滅ぼされるまで続く。

② 解放後もアケメネス朝ペルシャに居残ったイスラエルの民(東ユダヤ人と言われた)

* キュロス大王の寛容さ

- ・国教はゾロアスター教であったが、異邦人に関して彼らの宗教を認めた。
- ・バビロンの捕囚から50年が経過しており、国際都市バビロンの生活に慣れていた人々も多かった。

②解放後もアケメネス朝ペルシャに居残ったイスラエルの民(つづき)

* イスラエル人の優秀さが買われた

- ・イスラエル人は勤勉であり、律法^注を重視し、規則正しい生活を送っていた。
- ・異邦人の国家にあってもその優秀さが買われ、政治の中核(宰相など)へ上り詰める者が多かった。

(注)律法とは、法律が人の行動を律することに対し、人の心を律するもの。たとえば、ユダヤ教で神から与えられた宗教・倫理・社会生活上の命令や規定(十戒)

* 宰相になったユダヤ人には、古代エジプトのヨセフ、新バビロニア王国のダニエル、そしてアケメネス朝ペルシャにあってはモルデカイなどがいる。

⇒この東ユダヤ人がペルシャ人と共に中国に流れた可能性がある。
秦始皇帝の兵馬俑からはペルシャ人の人骨が出土している。

③紀元66年、ローマ施政下イスラエルの独立戦争

* イスラエルでユダヤ人の熱心党(ゼロテ党)がローマの守備隊を襲う事件が発生する。
ユダヤ人たちはローマ帝国に対して本格的な独立戦争を開始したのです。

* 皇帝ネロ(紀元37-68年)は、紀元68年にローマ軍を派遣し、圧倒的な軍事力でユダヤ人反乱を制圧。エルサレムの第2神殿は完全に破壊される。

参資1-6

⇒この破壊跡の一部が礼拝場の「嘆きの壁」です。
ユダヤ人は国を持つことを諦め、ディアスポラ(民族離散)の旅へ。

3. 日本にやってきた3種の秦人

(1) イスラエルの3度の滅亡

①紀元前722年、北朝イスラエル王国の滅亡。(失われたイスラエルの10氏族)

北朝イスラエルの民はアッシリア帝国軍に捕囚され、紀元前612年、奴隸解放後、歴史上から消える。

王様はハムラビ法典で有名なハムラビ王

②紀元前587年、南朝ユダ王国の滅亡(東ユダヤ人)

・新バビロニア王国の侵攻で滅亡し、バビロン捕囚解放後もアケメネス朝ペルシャに居残った民。

読本を参照

③紀元66年、ローマ施政下にあったイスラエルの独立戦争で滅亡

圧倒的な軍事力でユダヤ人反乱を制圧。エルサレムの第2神殿は完全に破壊される。

⇒ユダヤ人は国を持つことを諦め、ディアスポラの旅へ。

(2) 秦人としての移動

朝鮮半島に来たイスラエルの民は総て秦人(しんじん)と呼ばれた。

紀元前2世紀から朝鮮を経由し日本への断続的な移動があったと判断できる。

①スキタイと共に騎馬民族となったイスラエルの10支族の一部

* 紀元前2世紀から1世紀にかけ断続的に扶余系騎馬民族となり古代朝鮮(馬韓)に流入する。

・馬韓はあまりの流入の多さと秦人を嫌い朝鮮半島の半分を割譲する。

⇒秦人は「秦韓(辰韓)」と「弁韓(弁辰)」を建国する。

・馬韓の領土から「百濟」が起こる。百濟王家は高句麗と同じ扶余系騎馬民族であることが判明。

②秦帝国(紀元前206年)の崩壊により、秦人となり朝鮮半島へ流入

・秦始皇帝の実父とされる呂不韋(りょふい)は羌族^{注(きょうぞく)}であった。

(注)「羌族(きょうぞく)」は失われたイスラエルの10支族の末裔

③4世紀の弓月君(ゆづきのきみ)の日本への移動:百廿七県の民(応神天皇紀)